



Fusakazu Ishida

伝統芸能を通した地域コミュニティ再生

伝統芸能を通した地域教育

吉祥院六齋の歴史的意義



吉祥院六齋歴史研究会獅子の如く
代表 石田 房一

*It has been designated an Important Intangible Folk Cultural Property.
Kissyojin Rokusai Nenbutsu Odori, designated in 1983.*

1 設立の趣旨

獅子の如くは、六齋の歴史調査を通して、地域の伝統芸能の継承・発展につなげることを目的に、2010年4月1日に発足しました。

小学生時代から子ども六齋会で活動していた高校生や大学生、保存会の若手会員を中心に六齋の歴史調査を行い、現在に至る経緯をまとめた会報「獅子の如く」を年2回発行、吉祥院天満宮の六齋奉納（毎年4月25日、8月25日）に合わせ来場者に配る他、地域の方から聞き取り調査、資料、道具、写真等の収集、若手研究員を歴史の「語り部」に養成する活動を行っています。

現在、吉祥院六齋保存会会員の高齢化問題と担い手育成問題等で存続の危機に瀕していることから、獅子の如くとして、六齋の歴史的意義を地元伝える活動等、六齋の活性化に取り組んでいます。

吉祥院六齋念仏踊りが今日まで地域に伝えてきた思いを受け継ぎ、その姿を具体的な形に残すため、VHS映像をDVD化に編集、保存会会員の技を映像化、記録写真の収集、その編集過程で地域の古老から聞き取りを重ね、各家に眠る資料や楽器、写真を収集し、資料室に展示、子ども六齋会や六齋体験教室の指導、現在に至る経緯をまとめた会報「獅子の如く」の発行を吉祥院天満宮春夏季大祭に配布するなどの活動を行っています。

六齋保存活動はもちろんのこと、子どもたちに異世代と交流する場を設け、子どもたちに六齋活動の実践を通して、習得した成果や問題意識を地域教育として持ち込み、やる気や協調性を具体的な形にして、社会人としての基礎力を早期から身に付けることを重点に取り組んでいます。



人権フィールドワーク学習の様子

今後は、六齋保存会や地域の方々、学校等と連携を深めながら、様々な活動を進め、地域教育として地域文化として六齋を伝承していきたいと考えています。

六齋保存活動の危機的状況にある中、若者のやる気がその状況を変えてくれることを期待しています。

デザイン感覚に優れている若い感性と、論理的なものを上手く組み合わせることは、斬新な感性との創造力だと考えています。

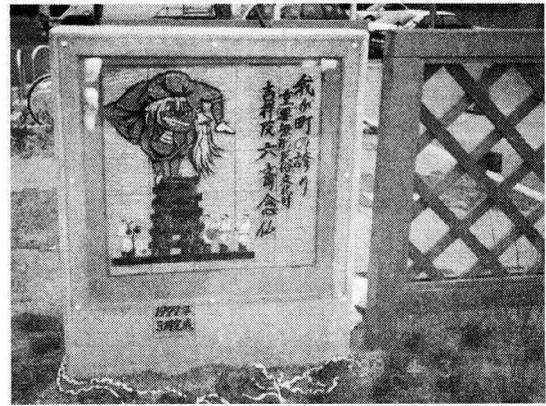
私たち獅子の如くがそれらを融合させる仕掛けをする役割でもあります。

2 吉祥院地域の概要と六斎念仏

吉祥院学区は、北に祥豊学区、唐橋学区、南に祥栄学区、上鳥羽学区に接した地域で、幹線道路は車両の抜け道として利用するため、交通量が比較的多い地域です。西に桂川、東は天神川（現西高瀬川）に囲まれ、古くから農業が盛んに営まれている地域で、美しい水は吉祥院の自慢の一つでした。その反面、幾度となく水害にみまわれた地域でもあります。

1931年（昭和6）吉祥院村から京都市へ編入され、その後、土地区画整理事業や都市基盤整備が進む中、人口が急増し、1979（昭和54）年4月には祥豊学区、1983年（昭和58年）4月には祥栄学区が独立し、現在に至ります。特に、1945年代（昭和20）以降、工業地域として豊かな田園地帯が大きく変貌し、1975年（昭和50）工場等の事業所数は、1960年（昭和35）の3倍となり、人口も約22,000人と飛躍的に増加しました。それに伴って、小学校の児童数も1,700名を超え、1977年（昭和52）には「祥豊小学校」、1983年（昭和58）には「祥栄小学校」が開校されました。ここ10年の動向では、南区の人口が漸減傾向にある中、世帯数で約400世帯、人口で約300人弱増加しています。これは農地、あるいは工場跡地にマンションが建設されたことなどが大きな要因となっており、現在の吉祥院学区の特徴とも言えます。近年の特徴としては、大型商業施設が建設されたことや、大企業の本社が多く存在することが挙げられます。

吉祥院学区の東西に通る「西国街道」には、商店が立ち並び、近所の人たちに親しまれています。また吉祥院学区に児童公園が7箇所と多く、中でも竹尻公園は、周辺住民や子どもたちから意見を出し合うワークショップ方式で再整備が進められ、花壇や遊具、屋根のあるステージ、身体に障害のある方にも配慮された男女別のトイレ、防火水槽、吉祥院六斎念仏踊りの陶板壁（子ども六斎会の子もたちが成作）が設置され、今では地域の交流の場となっています。



吉祥院地域内の竹尻公園に設置されている「六斎念仏踊り」の陶板壁

吉祥院の地名の由来は、1200年前804年（延暦23年）に菅原道真の祖父清公が遣唐使として唐への渡航中、暴風に会い、船上にて吉祥天女の靈験を得て、無事入唐し、任務を終えて帰国しました。このことから、自邸内にお堂を建て吉祥天女の尊像を祀られました。

これが吉祥院の由来で地名の起源となっています。

吉祥院天満宮は、菅原道真公の生誕された由緒ある所であり、その遺跡・史跡は「硯の水」「鑑の井」など数多く残されています。

2009年（平成21）10月、吉祥天女像が創建1200年を記念した大祭に公開されました。

この吉祥天女像の開帳は、祭神・菅原道真公の1050年忌にあたり、1953年（昭和28）の大祭以来55年ぶりで、その前の開帳は、江戸時代に一度だけと記録に残っています。

吉祥院天満宮の年間行事のうち、4月25日、8月25日の大祭は有名で広い境内には露店が立ち並び、大勢の参拝客や観光客で賑わうとともに、午後8時になると境内の舞楽殿で六斎奉納が行われます。吉祥院六斎念仏踊りは、国の重要無形民俗文化財に指定され、広く市民や観光客などに親しまれています。



五十五年ぶりに公開された「吉祥天女像」

3 伝統芸能を通じた 地域コミュニティの再生

地域に伝わる伝統芸能や文化財等の継承、担い手育成には、かなりの努力が必要です。

先人から受け継いだ貴重な文化財を子々孫々にまで残すことは、私たちの使命であり、地域への誇りを育てるため、地域コミュニティに果たす役割が大きいと考えています。

急激な社会情勢の変化に伴い、地域の文化財や伝統行事が地域から消えつつある今、これらの伝統芸能や文化財は、日本の貴重な財産で失われることは非常に残念なことです。

京都市南区吉祥院では、国の重要無形民俗文化財の指定を受けた吉祥院六斎念仏踊りの保存活動が地域住民の力で積極的に受け継ごうとする取り組みを進めています。

これには、NPO法人ふれあい吉祥院ネットワークが地域のまちづくりや伝統芸能の伝承する誇りを再認識するため、「六斎活性化推進事業」として取り組むなど、より前向きに保存活動に協力していることもプラスに働いています。また新たに吉祥院に住まれた方も、これらの活動を通して地域に根付き地域コミュニティの新しい一員となっています。

地域文化の創造、発信及び交流を目的に保



子ども六斎会の活動を紹介（京都新聞）

存活動の活性化を図り、地域・家庭・学校と連携し、それぞれ固有の役割を持ちながらもお互いつながりが重要です。そのつながりこそが本来の地域コミュニティですが、地域や町内のつながりが薄れたといわれる今、地域の祭りや伝統文化への参加を通じて、新旧住民が一体となる祭縁（コミュニティ）が大切であると言われはじめました。六斎を通して、吉祥院の住民に新たな活気を生み出す力となることを期待しています。

伝統芸能が継承されている吉祥院地域においては、地域の求心力として、六斎保存活動とまちづくり活動を上手く結び合わせ、地域コミュニティの再生に向けて、これからも力を尽くしていかなければなりません。



会報「獅子の如く」編集会議を兼ね練習会を見学。
（写真中央）關正雄獅子の如く顧問



保存会、研究会の指導で子どもたちも緊張感を持つて練習に励む。獅子の練習に取り組む。

4 地域文化に触れる 人間教育の場 が子ども六齋会

現在、子どもたちを取り巻く環境は、これまでに見られないほどの困難な状況となっています。就労実態を見ても、高、大学生の就職率も厳しく、就職しても職場の人間関係に悩み、離職してしまうことも少なくありません。高校卒業後、3年以内に離職するのが約5割いるというデータがあります。目的のある離職ではなく、会社に馴染めず、人間関係が上手く取れず、就職しても長続きせず、場合によっては、仕事をすることの意義が見いだせず、最悪の場合、引きこもるケースも増えているといえます。

さらに深刻なのは、同世代だけで遊び回る子どもたちの低年齢化で、互いに悪影響を及ぼし合っているとされています。その背景の一つに地域の絆が薄れてきているという指摘があります。家庭や地域など、学校以外で学ぶ場が重要になりますが、そこが抜け落ちているように感じます。

子どもたちが一日の生活時間を費やすのは、学校やクラブ活動、あるいは進学塾などで、先生などの大人を除けば、同世代だけに片寄ります。子どもが育つ中で、年代を異にする人たちと出会い、交流することは極端に少なくなっており、同年代の仲間だけになりがちです。卒業後の社会への不適応もここに大きな問題があるかもしれません。また同年代の付き合いであっても、メールやその掲示板等での短い言葉や絵文字だけでは、本当の人間関係は深まりません。

多様な年代の人たちと顔を合わせ、一緒に



何かに取り組むことで、人と人との関係が深まり、絆が生まれます。

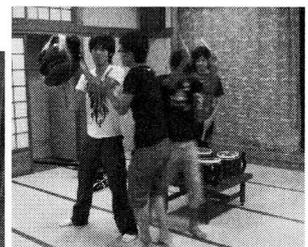
吉祥院六齋の保存活動は、ただ技術を伝えるだけでなく、子どもから高齢者まで含んだ人間教育の場として位置付け、より

豊かな地域コミュニティづくりも大きな役割を果たすことにつながります。

特に共通の目標である地域の伝統芸能を継承することは、かなり大変な部分もありますが、それだけにやり遂げた達成感や充実感で、喜びも大きいものです。練習会の少しの合間に話し掛けることでも、子どもたちへの影響は極めて大きいと考えています。

日常生活でもお互い顔を合わせ、挨拶を交わす程度でも、後々大きな意味を持ってきます。そういう意味では、子ども六齋会や獅子の如くの活動は、様々な職業や年齢層の人たちが、子どもたちを立派に導けるまちの先生たちが揃った地域教育集団でもあります。

社会で活躍している人や、いろいろな方面で努力をしてきた人たちと出会い、話すことは、子どもたちにとって益するものも多いです。子ども六齋会や獅子の如くの活動は、伝統文化の継承のみならず、これからの社会を担う子どもたちの人間教育の場として期待されています。



5 六斎活性化プロジェクト

吉祥院六斎活性化推進事業（六斎活性化プロジェクト）において、吉祥院六斎がまちづくりにどのような役割を果たすのかについて、リム・ボン氏（立命館大学産業社会学部教授）から「吉祥院地域と文化のまちづくり」の講演をいただきました。



講演／リム・ボン氏

テーマ「地域と文化のまちづくり」2002年

リム氏は、「吉祥院学区には、複合的な施設として、コミュニティセンターや体育施設、学習施設、高齢者福祉センター、診療所等が隣接している。ここを拠点にまちづくりを展開することによって、学区全域、あるいはその周辺地域をも含めた、かなりの広範囲な吸収力を持つ地域となり得る。このような活動には、地元の大企業などに協力を求め、まちづくりを展開することも考えられる。特に、国の重要無形民俗文化財に指定を受けた吉祥院六斎念仏の伝統を継承しているという文化的要素をまちづくりの利点とすべき」と地域文化を通して、全域を吸収したまちづくりのヒントをいただきました。その提言に基づき、NPO法人ふれあい吉祥院ネットワークでは、総合的なまちづくり活動を進め、地域の伝統文化を柱としたまちづくりを展開しています。

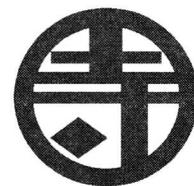
近年、少年の自殺、区悪犯罪が多発し、大きな社会問題となり、その背景には、いじめや不登校などの問題があり、このような社会状況の中、1996年（平成8）、吉祥院子ども六斎会を発足し、またその子どもたちの保護者でつくる吉祥院地域教育懇話会を立ち上げ、地域教育の場として、吉祥院人権工房（人権

問題学習会）やハッピーサマータイム、六斎宿泊練習会を取り組むなど、地域・家庭・学校と連携の中で、子どもたちが地域で学べる場を取り組んできました。

私が子どもの頃（昭和34年生れ）、子ども自身でつくるルールがあり、そこでコミュニケーションが機能していました。子どもが学ぶ場所は学校だけでなく、家庭や地域の中で自然発生的に生まれ、地域のお兄ちゃんやおっちゃんに関わりながら社会のルールを学んできました。公園や空き地で、遊びの延長から自然と子ども自身でつくるルールで草野球がはじまり、人数が揃わない場合でも、三角ベースに変更しながら友達同士や上級生らと協調することの重要性や、自分の意見を主張することなどを身につけてきました。しかし近年では、その地域や家族の機能が低下したことで学ぶ場が学校だけに偏り、そうしたことが、子どもの成長や幼児期の教育そのものが歪めてしまっているように感じます。

吉祥院地域には、六斎念仏踊りが伝承されており、この六斎を通じて、子どもたちが地域で楽しく学べる場、くつろげる場が必要です。

6 六斎寺子屋



六斎寺子屋

2013年度（平成25）
4月より、子ども六斎会
会で活動する子どもたち
（小・中・高校生）を対象に
地域で学べる場、くつろげる場として
六斎寺子屋を開校することになりました。

六斎寺子屋は、子どもたち各自が宿題や補習等を持ち寄り、自主学習を行う他、六斎の歴史を調べたり、体験学習やレクレーション、宿泊練習会等を実施し、子どもと保護者、地域ボランティアが地域資源を活用しながら、お互いが学習、交流し合う、学べる居場所を効果的に確保することで、地域文化と学校教育の緊密な連携で、様々な課題等に対応して行きたいと考えています。

やらされてやるのではなく、自らが主体性を持って取り組むことを重点に置き、結果よりプロセスが育ってくれればと考えています。

六齋で例えるなら、どうすれば上手に太鼓が叩けるのか、どうすれば躍動感のある獅子を演じられるのか、どんな稽古をすればいいのか、継承するためには何が必要なのか…。

子どもたち自らが考えていく中で、創造力や主体性が知恵として身になれば願っています。さらには、六齋保存活動の担い手育成に主観に置いた六齋体験教室の充実、指導者育成など、そうした点を織り込んだ六齋サポート体制の組織化（六齋歴史まちづくり支援会議）、他の文化財との交流を取り入れた他文化交流事業を通して、子ども同士が文化コミュニティのネットワーク形成につながることも期待しています。



7 研究会の具体的な活動

●六齋担い手育成事業

子ども六齋運営委員会の充実・子ども六齋会の指導・技術指導体制の強化・発表の場の提供・六齋体験教室の指導等

●歴史調査研究事業

歴史調査・講師派遣・語り部の養成・六齋資料展示会を活用した特別展の実施。

●六齋活性化支援体制の確立

地域、企業等の支援体制の確立・新たな保存方法と活用システムの構築等

●六齋活性化事業

六齋PR企画・六齋のまち吉祥院をキーワードに子ども六齋会と研究会のコラボによる六齋ゆかりのノベルティグッズ作成、六齋奉

納やイベントなど機会あるごとに着用し、六齋の活性化を目指す。

8 国の重要無形民俗文化財に指定

国が指定する重要無形民俗文化財とは、衣食住・生業・信仰・年中行事などに関する風俗慣習、民俗芸能、民俗技術など、人々が日常生活の中で生み出し、継承してきた無形の民俗文化財のうち、特に重要なものとして国が指定します。この指定制度は、1975年（昭和50）の文化財保護法の改正によって実現され、1976年5月4日に第1回として30件が指定されて以来、2011年（平成23）で合計272件が指定されています。背景として、文化財保護法では、無形の民俗文化財を「衣食住・生業・信仰・年中行事等に関する風俗慣習、民俗芸能、民俗技術を含み、日本では国民の生活の推移の理解のため欠くことのできないもの」と規定しています。これまで「無形の民俗資料」といわれてきたもので民俗学が「民間伝承」として学問の対象されました。

この指定制度が発足した背景には、平凡な人々の間に繰り返されてきた伝承文化が保護の対象になるという考え方が定着したことにもよりますが、昨今の社会の急激な変貌によって、営々と長期にわたって継承されてきた独自の保存方法が今絶滅の危機に瀕しているという問題意識によるところが大きいといえます。



9 吉祥院六斎の持つ メッセージを伝える

学校や保育所等への訪問や交流によって、教科書だけでは学ぶことができない地域文

化を継承者として自ら伝えることが重要と考えています。また小学校では、子どもたちの感性を育て、地域の伝統芸能や様々な文化財と出逢い、経験を重ねる中で、地域の文化を学ぶことへの意欲や、豊かな表現力、社会性等、総合学習がカリキュラムとして組まれています。近年、子どもたちを取り巻く社会状況は、様々な問題を抱えており、意識や価値観も多様化する傾向にある中、地域に根ざした伝統芸能を見直そうという取り組みが地域、学校等で行われています。地域の伝統芸能や文化を学び、伝承していくことがまちの活性化や地域のアイディティティの形成につながると考えられ、小学校では、地域の伝統芸能を学校教育の一環として積極的に取り入れられています。吉祥院地域には、8組の六斎保存会が存在し、現在では菅原町の一組のみとなっていることから、保存意識がかなり強いのがものがあります。特に菅原組の六斎は、差別との闘いという歴史的背景があり、それが六斎に対する思いや憧れ、特別視となって表れ、そのため六斎に対する願望が強く、それが継承していくという気持ちに強く反映されています。地域住民は、六斎の保存意識については「六斎保存会の人やるもの」という認識があります。いうなれば、六斎保存活動は自分たちとは別の人が継承するもので、専門的な技術を持っている人が、専門的な指導のもとで継承するという認識があります。

現在、吉祥院六斎保存会の高齢化問題、担い手問題で存続の危機に瀕し、担い手育成は大きな課題の一つになっています。地域住民や子どもたちに広く伝えようとする強い意志と努力がなければ、地域固有の文化財でもたちまち衰退し、形骸化していきます。

Kissyoin
Rokusai Nenbutsu Odori.

MESSAGE

六斎の持つ歴史やメッセージを地域や学校がどこまで関わり、改善させることができるかが鍵になります。

例えば、学校教育と六斎保存活動が結びつくことは、六斎を後世に残していくことの重要性だけでなく、地域への誇りや愛着を体現する存在であるという認識を広く培うことにつながります。

加えて、子ども六斎会で学ぶ子どもたちが「保育所＝小学校＝中学校」を通して連携することは、六斎を通じた人間同士のつながり、とりわけ中学生が小学生に教えるといった縦のつながりを作ることに役立ちます。

地域教育として、六斎を伝えることにより、六斎に対する理解が高まり、より身近なものとして認識されます。つまり、誰でも六斎に関係する知見や情報を伝えることができるなど、分け隔てなく誰でも六斎保存活動に携わることができ、これまで携われなかった人が六斎を身近なものに感じられます。

保育所、学校、六斎寺子屋などが連携した取り組みで、少子高齢化や過疎化によって、担い手不足の問題も解決されます。

こうした取り組みが実を結べば、六斎に関心がある子どもたちや六斎保存活動に強い意識を持った子どもたちがでてくることで、押し付けや強制によって引き受けるのではなく、主体的に意識を持った子どもたちが育っていくことになります。また、地域住民が六斎に対する共通認識を持ち、地域を活性化するまちづくりに結びつけられれば、それは六斎という伝統芸能を介した地域の一体化や活性化、郷土愛につながります。すなわち、六斎保存活動は、伝統芸能を通じた人間関係の深化、地域への愛着度の向上、共通認識や価値観の形成、縦関係の構築、担い手問題等に資する可能性を宿しています。

10 六齋に係る歴史資料

●菅原町（南条）の概要

- ・1950年代、当時の菅原町（南条）の就労状況は8割が農家で、あとは日雇いが多く、地主は少なく、小作が多い。
- ・桂川と西高瀬川に挟まれ古くは幾度となく水害にみまわれてきた地域である。
- ・国道1号線と171号線を結ぶ市道55号線（祥鳥橋通り）が東西に走り、地区を南北に分断しており、その周辺は住宅・商店・工場が混然とした状態にある。
- ・周辺地域と同様に農地が宅地に変わり建て売り住宅やマンションが建設され、急激な混住化が進む。
- ・比較的良住宅が多く、不良住宅が少なかったことから地区改良事業が受けられず、改良住宅の建設は実施されていない。そのため旧家が多く、六齋に関する古い資料が多く残っている。
- ・地区内に公共施設が整備され、特に教育・啓発・福祉を重点課題に取り組みられた地域である。

●吉祥院六齋念仏踊りの歴史

- ・吉祥院地域における六齋念仏の起源説には、
説①：平安時代後期、吉祥院天満宮の勅祭に「獅子舞」を奉納したことに始まる。
説②：山崎の合戦で豊臣秀吉軍に破れて敗走し、吉祥院で息絶えた明智光秀軍の残党を弔ったのがその起こりであると伝えられている。
- ・時代的な隔りがあるが7月15日の「うら盆」は、「死者をとむら弔う」とともに「現世に生きる人々には、その行事を通して楽しみを与える日」とされていることから「天満宮の獅子舞奉納」と「うら盆の死者への弔い」とが結合して、吉祥院六齋念仏が行われるに至ったと考えられている。
- ・六齋念仏は、空也堂から派生した仏教にかかわる踊りが、神道である天満宮の境内に奉納されたのかについては、住民は天満宮

の氏子にあたるため、氏神に奉納するのが定着した。天満宮には明治前後から奉納されている。

- ・六齋の舞台には、ひのき舞台とまわり舞台があり、ひのき舞台は、吉祥院天満宮や清水寺の舞台、まわり舞台は、地元の地藏盆まわりで、稽古がてらに各町内の地藏盆をまわり、天満宮や清水寺のひのき舞台が仕上げとなる。
- ・ひのき舞台には「銭金には関係ない。芸を奉納する」という粋な時代があった。
- ・吉祥院六齋保存会も第二次大戦を境に衰退しはじめ、特に、15歳で強制的に青年会に入会する決まりがあった。入会すると一人前の男として認めてもらえ、町内の仕事にも一人前の男として扱ってくれる。入らなければいつまで経っても半人前扱いされた。
- ・高山京都市長時代、市長自身が六齋が好きだということもあり、円山野外音楽堂で京都市内12団体が出演した「六齋コンクール」が開催され、吉祥院六齋が連続3回の優勝を果す。市長は「全盛期の吉祥院六齋念仏は、本当に素晴らしかった！」と話された。

●六齋にまつわる差別事件

- ・差別のため六齋が行えず、他の組からウソを教えられ、そのウソを演じて笑われた。
- ・各組には組独特な芸を持つため、教えるなどこの六齋組が教えたのか分かってしまうため、本当の芸を教えてもらえなかった。
- ・大正初期、当時の子どもたちが小学校に行くにも、他町の子どもはカバンに下駄か靴で、部落の子どもたちは、ボロボロの風呂敷にわら草履で、雨降りには、その草履が濡れるので、裸足になり「ペタ、ペタ」と音を立てて歩くため、それを見た先生から「部落の子は裸足でも六齋している」と言われ、子どもたちは学校の窓ガラスを割り、登校拒否する抗議行動を起こす。
- ・清水寺の舞台での六齋奉納で、先着順に提灯を持って奉納するとき、後の六齋組から「部落者に舞台へ登らすな」「部落の後に

舞台に上げられるか」「あいつら“あれ”やから！」と舞台に塩を撒かれ、若い衆が大ケンカになる。

●解放運動結成によって町内会が分裂

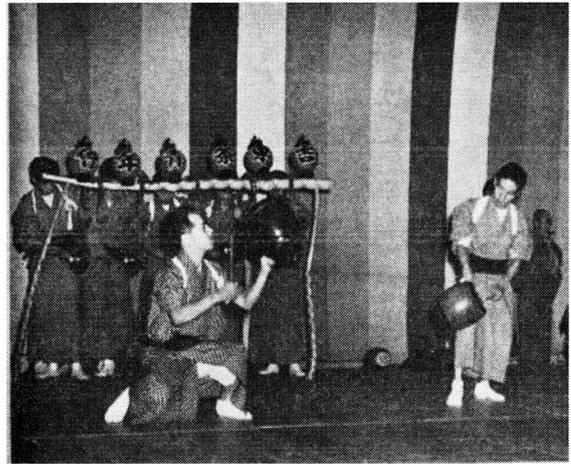
- ・近郊農村型被差別部落ゆえの保守的な考えがあり、解放運動の組織化が難しい地域であった。
- ・1980年（昭和55）7月5日、地元で部落解放運動が結成する。
- ・結成に反対の住民が相次いで町内会を脱退し、分裂する。この町内には解放運動や同和施策は必要としないという理由であった。
- ・同時に六斎保存会からも脱退者が相次ぎ、六斎の存続が危ぶまれる。
- ・支部青年たちが六斎の歴史的事実を知り、差別の怒りとともに、自分たちこそ、その火を消さない役割を果たすために差別に立ち向かい、青年全員が六斎保存会に加入する。

●吉祥院子ども六斎会の発足

- ・吉祥院学習施設で子どもたちが六斎の歴史を学び、1995年4月に「吉祥院子ども六斎会」が発足する。
- ・六斎の歴史を学ぶ他、自ら六斎の継承発展に取り組み、こうした子どもたちの活動が地域や保存会に伝わり、六斎の活性化に向け地域全体が保存活動に協力の兆しが見えはじめる。

●六斎を通したまちづくり

- ・吉祥院六斎念仏の伝統を継承している「文化的要素」をまちづくり活動の利点とした「アクションプログラム」を練り、実行に移す取り組みを展開する。
- ・六斎歴史資料展示室を吉祥院六斎や吉祥院の「まちづくり・ひとづくり」のビジョンを考え、他の六斎組が一つでも活動を復活することを願う。
- ・吉祥院六斎担い手育成基金を募って、六斎の伝承・育成・まちづくり活動につなげる。
- ・六斎を通じてまちづくりの活性化を目指す。



吉祥院六斎念仏踊り

●六斎念仏踊りと黒人音楽ゴスペルの共通点

- ・アメリカ黒人居住区のハーレムで歌われた黒人霊歌は、奴隷解放後のゴスペルとして発展する。
- ・奴隷であった黒人たちは、奴隷解放後も教会とみなされない道沿いの教会で黒人共同体の中心にあり続け、黒人の気持ちに沿う霊歌が作られ、伝承されてきた。
- ・ゴスペルが正規のキリスト教賛美歌と異なるのは、大衆の間で生まれた福音唱歌からである。
- ・ゴスペルを黒人差別、奴隷解放、まちづくり運動、まちの活性化につながる。



黒人霊歌（ゴスペル）

吉祥院六齋を守り・育て・未来にトライ

1 TRY . . . 住民が伝統芸能「六齋念仏」の価値に気づく

最も身近な住民自身が地域の伝統芸能である「六齋念仏」の存在を再認識し、その価値に気づくことが最初の試みとなる。吉祥院地域の住民が、まず地元共有財産である「六齋念仏」の存在を把握し、重要性に気づき、地域全体として共通認識を持つシステムづくりが必要となる。

■「六齋念仏」は貴重な吉祥院地域の資源



六齋の歴史的意義について講演
(人権フィールドワークにて)

吉祥院地域の伝統芸能である六齋念仏は、地域全体の共有財産であり、六齋への愛着や保存活動への参加意識を育てる貴重な資源になります。一度その火が消滅してしまうと復活が困難となるため、継承、担い手の存在が重要な課題になります。しかし、六齋念仏は、芸術の創造を意図して維持・継承されてきたわけではなく、生活の歴史そのものであるという特徴を持っています。その伝承に長年携わってきた人たちは、普段の生活に身近すぎて、価値あるものとして意識せず、そのため、次世代の子どもたちに歴史的意義の経緯等はあまり説明されませんでした。

六齋念仏は、地域性との深い関連と共に伝えられ、大切な物として認識されますが、それだけの場合、貴重なものと気づかずに価値づけられず消滅していく可能性を持っています。

■「六齋念仏」の価値を発見

地域住民が伝統文化の重要性に気づくシステムづくりが必要です。現在、NPO法人ふれあい吉祥院ネットワークによる六齋体験教室や吉祥院小学校や保育所の学習等を活用して子どもたちに「地域の文化に触れる」「地域芸能を体験する」などの試みにより、新たな地域の価値の発見する取り組みが行われはじめました。

六齋に関わる人々は、六齋保存会の関係者だけではなく、学校や行政等の地域の組織、その他、ボランティアなどが存在しますが、あくまでもその価値に気づき活用する主体は、地域住民が参画する地域社会であり、学校や行政などはサポーターになります。こうした六齋の価値観が吉祥院地域を維持・継承し、文化のまちづくりを行っていくための試みとしての第一歩となります。



吉祥院天満宮六齋奉納に出演する子ども六齋会
(吉祥院天満宮にて)

2 TRY・・・新たな担い手を地域全体でサポート

「六斎念仏」そのものの評価するだけでは、地域で息づくことも自然に維持・継承されることもあり得ない。しかし近年、かつての年代や性別、社会的な立場による役割分担と地縁組織を越えたNPO組織の機能集団の中に、必ず存在する新たな担い手を再評価するとともに地域全体で試みるためのシステムづくり、また新たな担い手を発見・発掘・創出していく地域の雰囲気づくりが重要となる。

■『六斎念仏』の新たな担い手の創出

六斎の活性化、担い手育成等は、これまでの六斎保存会の運営では困難であることは事実です。次世代に継承すべき六斎は、従来の伝統的な継承システムに課題があり、消滅の危機に瀕する中、従来のシステムを単純に復活するのではなく、維持・継承のための新たな「組織運営・担い手発掘・創出」という考え方が必要になります。

近年、全国各地において、かつての年代・性別・地域社会の中の立場による役割分担、あるいは町内会の地縁関係等にこだわらず、活動目的を絞った機能集団であるNPO組織の新たな担い手の出現がでています。地域社会の中で立場上決められた役割を遂行するのではなく、活動内容や機能により、有志のメンバーが個人の意志で活動内容を選択し、主体的に参画できる状況が望ましい。それらは、従来の伝承のしきたりに反する方法や維持・保存・継承される伝統文化が本来の形では多少異なる結果となるという課題も存在しますが、六斎体験教室など活性化に向けて、NPO組織や地域社会全体で六斎の継承・担い手・支援の方法等を検討しながら一連の活動を行っていくプロセス自体が重要になり、活力ある地域社会の再形成にもつながるものと考えています。

■『六斎念仏』を地域社会全体でサポート

町内会の祭りや神輿、地藏盆等に、NPO組織やボランティアグループ等が加わり、力を発揮する場面が生まれています。

祭りや地藏盆などの担い手も、様々な活動を地域社会が主体となって進めていくとして

も、外部サポートの存在は大きな活力となります。特に力強いサポーターとなるのが、他地域に転出した地元出身者であるかもしれません。共に価値観を発見し、役割分担をしておくことにより、大きな力となり、未来の重要な主体に育っていきます。



吉祥院寺の六斎念仏の子どもたち

■『六斎念仏』の担い手は地域社会が主体

いずれにしても、NPO組織やボランティアグループ等、地域社会のサポーターとして力を借りることが大切になってきますが、六斎を息づかせる新たな担い手は、地域住民自身であると認識し、自ら取り組んでいく主体性が最も重要になります。既存の地縁組織を活用したり、新たなNPO組織がその重要な主体となり、さらに、学校や行政などの外部のサポーターが支援することで、より魅力的な地域社会が再生され、維持・継承されます。

これらの芽を消さず、地域社会全体でサポートしていくことができるような雰囲気づくりが重要となります。六斎の新たな担い手の創出と支援、新しい維持・継承システムの導入は、地域社会全体が地域の将来を見据えて、自身の判断・決断をしていく重要な事項になります。

3 TRY . . . 『六齋念仏』 再生アイデア・創出へ

新たな担い手を地域全体で考え『六齋念仏』そのものの保存・発展について、地域社会によるアイデアで再生・創出を視野に入れつつ、『六齋念仏』を活性化する活動を計画・実行する。このような一連のプロセスが『六齋念仏』を息づく地域社会を持つ魅力的な吉祥院地域への発展していく重要な計画要件となる。

■ 魅力あるまちづくりを試みる！

地域の伝統文化そのものの維持・保存は、大変重要なことですが、そこにとどまらず、新たな担い手を地域社会全体でサポートしていきながら、六齋を活用した活動を現在に生きる私たちが、積極的に参画できる形態に工夫していく再生・創出のあり方を模索していくことも、魅力ある吉祥院のまちづくりに向けた試みの一つになります。

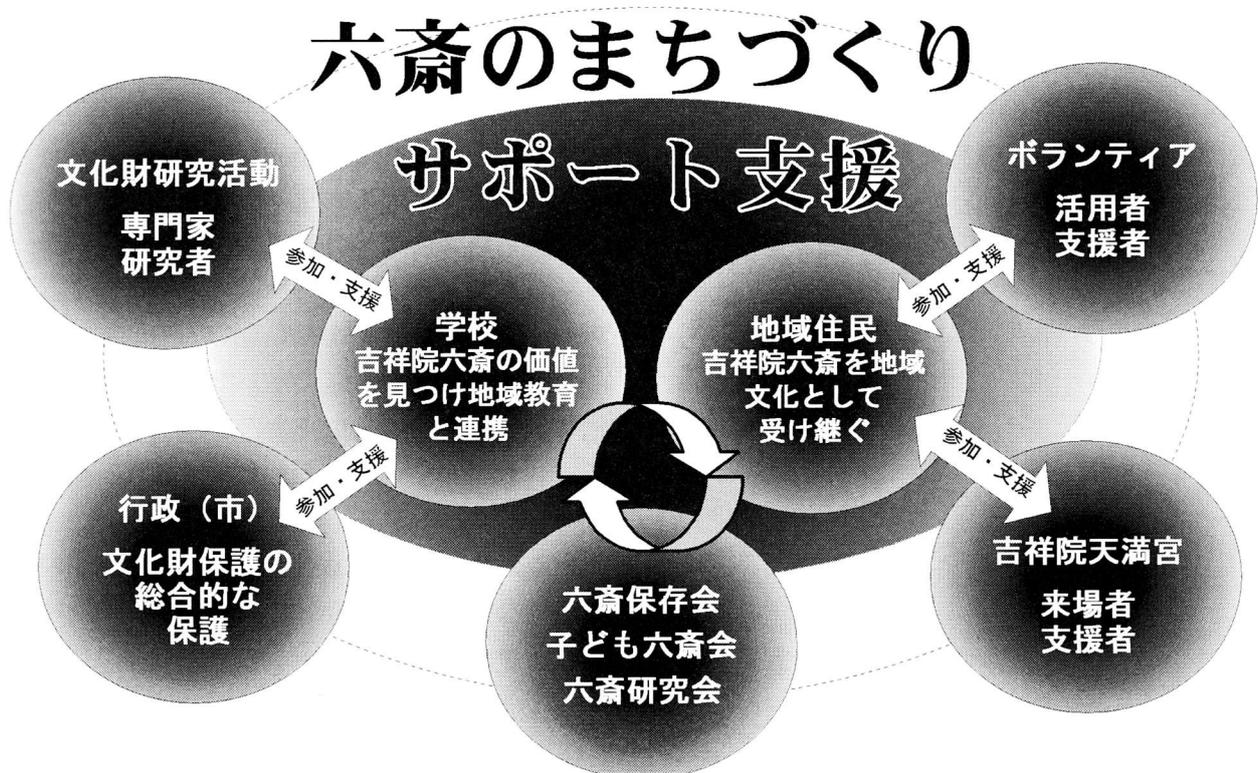
六齋の活性化は、NPO法人の会報やホームページを活用した広報活動でも従来では想像もできなかった大きい支援体制を獲得します。

六齋の活性化の事業をアレンジし、再生・創造していく手法は無限に存在し、吉祥院独自の方法を見つけていくことは、六齋を活かしたデザインコードを掘り越し、質の高い表現方法を模索することでもできます。

■ 『六齋念仏』の再生と創造がもたらす地域の活性化

このように、六齋の再生・創造とは、現代において再構築することであり、これらの作業は、まちづくりの活性化に直接つながっていきます。さらに、地域住民が主体となって行う一連の活動は、まちの活性化のためというプレッシャーの下での義務感によってではなく、一人ひとりが楽しんで参画していくことが何よりも大切です。六齋保存のための義務的という特別な意気込みではなく、特技を活かした有志ボランティアや創造性を生み出し、結果としてまちの活性化につながることも少なくありません。六齋が息づくまちを背景に、私たちが楽しく暮らす姿勢は、次世代の担う子どもたちに吉祥院地域の魅力が自然に伝わっていく最も効果的な方法になります。

● 吉祥院六齋を支える地域マネジメントのイメージ ●



試み 4 TRY . . . 『六斎念仏』を通じた地域活動を次世代へ

地域全体による『六斎念仏』を活用した活動の成果は、軌道に乗れば終わりというわけではない。その後も、情報発信・交流等を行っていくことで、他地域の参考となる外部からの評価を地元に戻す等、より地域に適した活用ノウハウに改良していくことが出来る。『六斎念仏』の活用を切っ掛けに、地域社会が地域活力のマネジメント能力を見につけ、魅力ある『六斎念仏』という地域財産を後世に伝えることとなる。

■ 『六斎念仏』を支える地域マネジメント



地域住民が主役となり、必要に応じて学校や行政のサポート、他組織との連携、地域外支援者の協力等を得ながら、六斎の価値を見直し、担っていく体制を工夫し、六斎歴史まちづくりに活かす再生と創造の取り組みを行うことを通じて、六斎運営のマネジメントする能力を養うことになります。

魅力ある六斎を息づかせ、活用していく地域社会の維持・継承は、地域資源としての保全と管理を、地域社会全体で担うためのマネジメント、そのものであるといえます。

■ 『六斎念仏』の情報発信と地域社会の成長



吉祥院小学校3年生総合学習 六斎の授業

さらに現時点の維持にとどまらず、後世への継承方法も含めて、様々な地域への情報発信・交換を試みていくことが効果的です。

六斎の価値発見の方法、新たな担い手の創出方法、サポート方策、文化のアレンジ、再生と創造等、オリジナリティ溢れる経緯と効果を情報発信していくことで、新たな地域間交流・団体間交流・多世代交流を生み出されます。それは同時に、まちづくり活動のあり方が他地域に評価され、新たな課題を生むこ



とになるかもしれません。しかし、様々な形態による情報交換により、他地域のノウハウや新しい情報を得ることにもつながり、より地域に適した魅力的なマネジメントを行う力をつけ、まちとひとは成長していきます。

力強く活気があり、安定したまちの維持・継承と発展、そこで生き生き活動する大人の姿は、必ず次世代の子どもたちに通じるものであり、魅力あるまちづくりにつながります。

六斎が息づくまちづくりは、吉祥院地域の総合的な魅力を引き出してくれることを期待しています。

保存・支援体制の構築

— 保存に関わる支援体制 —

これまでの六斎保存活動は、保存会や関係者レベルの主体性に委ねられてきた感があります。しかし、若者の減少、流出や都市化など、住民のライフスタイルの変化などにより、これまでの保存活動を伝承していた村システムが過度期を迎えており、今後の地域での継承のあり方を見直し、新たな保存と活用のシステムを構築する必要があります。

その前提となるのは以下の考え方です。

- 吉祥院六斎を地域の文化遺産として保存・活用する。
- 吉祥院六斎そのものだけでなく、それを育む歴史や環境、人的ネットワークも含めた総合的な保存・活用体制を築く。
- 六斎保存会や町内会が保存してきた従来のあり方（町内ベースの保存活動）を継承しつつ、六斎に関心を持つ多くの人々（学区民、NPO、ボランティア等）の参画を得る。

六斎保存活動は、これまでの課題を乗り越え、主体となる保存会や町内会とそれを支える他地域住民やNPO組織、ボランティア、そして学校、行政による協働作業で実現していくことが望まれます。

1. サポーター 六斎支援者

六斎の伝承は、地域の伝統文化財とのつながりを再確認し、愛着や歴史などを次世代に継いでいく必要があります。千年近く伝承している文化遺産として価値を発見し、どのように関わるかを自ら考えることが重要です。

このようにそれぞれの役割の貫徹と横の連携として、六斎に関する情報交換、保存・支援に関する調整、住民レベルの活動への支援など、獅子の如くの役割でもあると考えています。保存・支援・協働の場として、保存会と住民などが地域の文化遺産を活性化するシステムの構築を図る目的として、六斎支援者を募集し、こうした支援者等に対する調整役

が重要です。

同時に、将来は保存会や子ども六斎会が主体的な運営を図ることのできるマネジメントの構築を目指せる人材育成に取り組みたいと考えています。

2. サポーターシステム 伝統文化財支援体制

六斎保存活動に関わる人材育成を戦略的な位置づけとして、六斎を保存（技能等）する人を『伝承者』。六斎を活用する人を『活用者』。それらを支援する人を『サポーター支援者』に分類し、それぞれ以下のような保存・活用・支援体制の展開が必要です。

●伝承者

六斎を伝承する人は、六斎が所在する町内に住む人、または、そのつながりがある人であり、六斎に対して誇りや愛着を抱き、自ら保存活動と継承・改善を図り、同時に重要無形民俗文化財の伝承者として育成します。

直接保存活動に関わらなくとも六斎を守り育てたいと活動する人材を育てることで

●活用者

六斎を活用する人は、吉祥院地域の住民です。地域に代々受け継がれてきた文化財を次世代に受け継がなくてはなりません。六斎を地域全体で伝承するよう、その活用を通して、維持管理が地域に環流されるような仕組みを築くことが望まれます。

●サポーター支援者

六斎の伝承者・活用者をつなぎ支援する人は、吉祥院地域の出身者、知人・友人・企業等であるなど、伝承者ほどでなくても、地域にゆかりや愛情を持つ人であり、イベントや奉納の際には駆けつけたり、物心両面で支援することも期待されます。

3. 育成の具体例

(1) 情報提供、イベントへの参加を促進

- ・六齋に関する情報を定期的に情報発信を行う。(会報・ホームページなど)
- ・六齋をテーマとしたイベント等への参加を促す。(体験教室など)
- ・会報の編集・発行を通して地域住民や団体間の交流・連携を促進する人材の育成。

(2) 六齋の語り部の育成・技術向上

- ・六齋体験教室を開催し、関心を持つ人材や六齋歴史資料展示室の説明・語り部となる人材の発掘、育成を行う。
- ・他地域の六齋組との連携、技術研修会を実施する。
- ・地域の老人会などの既存組織と連携し、六齋の歴史資料、写真等を提供、六齋の歴史の伝承者として活用する。

(3) リーダーの発掘と育成

- ・資料展示室や六齋体験教室を活用し、六齋に関心が高く、地域内の意見をまとめ

ることができるような人材を発掘し、地域での保存・活用の核となるリーダーを養成する。

(4) 六齋マネジメントの育成

- ・六齋保存に関わる人材に対し、文化財保護の研修への派遣や専門機関からのアドバイザー派遣を要請し、保存活動のマネジメントの人材として育成する。
- ・六齋保存活動に関わる人材を対象に歴史文化に対する研修機会を設ける。
- ・吉祥院いきいき市民活動センターを通して、六齋歴史資料展示室の運用に活用可能な公的資金(補助事業や助成金など)の情報を提供する。

4. 担い手育成の指導【考】

地元の小学1年生から大学生までの子どもたちを六齋の担い手として、子ども六齋会、研究会を通して、子どもたちを指導する中で、ふざけて稽古をしない、約束を守らないときなど、時には厳しい指導も必要だと思うこともあります。しかし、厳しく怒るだけの指導は、怒られないためにその場しのぎの稽古をします。子どもたちの自立心が育たなくなってしまう。なぜ上達しないのか、どうしたら太鼓技が上手くなるのか、子どもたちが考えるアドバイスを心掛けていますが、指導することの難しさを痛感しています。

指導する側の目的は、子どもたちを育てることです。子どもに話しかけ、足りない部分を本人に気付かせ、本気で向き合うことから始まります。子どもたちも痛みや挫折、失敗を経験することで、何かを学んでくれればと思います。子ども六齋会は、人づくり、人間教育の場と考えています。千年以上続く伝統芸能の「重み」、六齋の諸道具を大切に「心」、始まりと終わりの挨拶する「礼儀」、「歴史」や「コミュニケーション」など、技術の他にも大切なことも学んで欲しいのです。



if there were no pain, there would be no gains. 痛みないしに何も得ることができない
(痛みや挫折、失敗を経験してこそ、何かを学ぶことが出来る)



基礎-基本の定義

基礎・基本という言葉は、伝統芸能はもとより、勉強やスポーツにおいてもよく使われますが、基礎・基本の言葉の意味や使用法が明確に区別されていない場合も少なくありません。そこで吉祥院子ども六斎会の指導における「基礎」と「基本」を以下のように定義します。

基礎

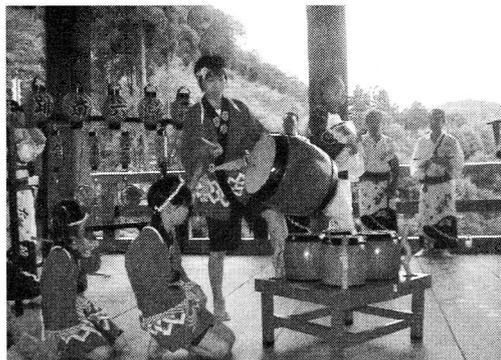
六斎の指導における「基礎」は、六斎を継承する上での土台であり、向上のための必須条件を意味しますが、技術的な要素は含まれません。具体的には、「六斎が好き」といった身体活動に対する積極的な心構え、「上手になりたい」といった向上心、「難しいことや新たなことに挑戦したい」等、チャレンジ精神の精神的な内容が含まれます。

また、伝統の重み、礼儀、仲間との協調、協働して活動できる社会性、コミュニケーション能力、知的能力、道具の保管、管理、運搬、身体的な要素として、自分が六斎を継承しようとする思い、感謝や礼儀も基礎の中に入ります。

基本

六斎の指導における「基本」は、技術的要素を意味し、これには演技や演目に関することなどがあります。

具体的には、太鼓技であれば、太鼓の打ち方（叩き方）、早く叩くのではなく、叩く速度、叩く間、叩く前の姿勢といったこととなります。「基本」がしっかりと身につけているからこそ、応用がきき、発展的・創造的な技が表現されます。



清水寺六斎奉納 2003（平成15）年8月17日



『基礎』は樹木の根であり、『基本』は高く伸びていく幹です。根がしっかりしていれば、太く逞しい幹が育ち、その幹からは、幾多の枝葉が伸び、やがては大樹になり、たくさんの豊かな実がなります。

基礎 — 基本

基本

幹が太くならなければ、たくさんの豊かな実を生らない。
「基本」優れた技を支える要素。

基礎

土台がしっかりしていなければ伸びる木は育たない。
「基礎」すべての技を支える土台。向上のための必須要素。



基本

基礎

念仏と芸能

1 空也堂(光勝寺)

京都市中京区蛸薬師通油小路西入ル龜屋町
(堀川高校東南角) 電話：075-255-1585



空也堂(光勝寺)

京都市中京区蛸薬師通にある天台宗の寺で、しうんざんこうしやうじこくらくいん紫雲山光勝寺空也堂極楽院といい、世に念仏を広めて市聖といわれた空也上人が天慶年間(938~947年)に開きました。

その縁起には、平定盛が空也上人の可愛がっていた鹿を射殺したため、それを悔いて一字を創建、空也を開山とし、自ら第二世になりました。



(地誌類にみる絵画資料① 安永9年刊「都名所図会」)

上図は、天明7年(1787年)に刊行された「拾遺都名所図会」所載の「空也堂踊念仏図絵」。祈祷する僧侶や鉦を叩きながら踊る鉢叩きの宗徒、見物する人たちの様子などが描かれています。

2 全国各地で伝わる念仏

念仏や和賛を唱えながら、鉦、太鼓などを叩いて踊る民俗芸能で踊念仏とも言われており、平安時代に空也上人が始めました。

空也上人は、民衆に念仏を広め市聖とも阿弥陀聖とも崇敬されましたが京の市や四条の辻で踊念仏を始めたといわれています。

空也上人の念仏に踊りが伴っていたかどうかは明らかではありませんが、鎌倉時代になって一遍が出て諸国遊行し、踊念仏を広めたといわれています。

一遍上人絵伝(1299年)には、当時の踊念仏の様子が描かれていますが、それは勇躍歓喜しつつ乱舞形式で踊ったものようでした。

このように踊念仏には、特に定まった型がなかったので、のちには他の芸能と結び付いたり風流化したりして、娯楽的色彩を強めるに至り、全国各地で様々な特色をもって行われるようになりました。

今日、全国に数多く伝わる念仏踊は、大念仏、天道念仏、天念仏、空也念仏、泡齋念仏、六齋念仏などの名称のようにその内容も多彩です。

大念仏は、本来大勢集まって念仏を唱える行事で、京都嵯峨や壬生が有名ですが、静岡県浜松市一帯の大念仏は、新盆の回向や寺院施餓鬼を行う供養の念仏であり、山梨県南都留郡秋山村無生野の大念仏は祈祷的要素の強い念仏です。

天道念仏は、太陽を拝み五穀豊穰を祈る踊り、栃木県の天念仏は、やはり五穀豊穰を祈願し、行人が天棚の周りを行道していました。

福島県の空也念仏は、空也上人の命日といわれる9月11日にその墓前で踊られていました。

泡齋念仏は、常陸の僧泡齋が勧進のため踊り出したといわれています。

京都の六齋念仏には、種々の芸能が加わって行われています。この他にも念仏踊には、夜念仏、じゃんがら念仏、念仏剣舞などがありますが、全国に広く行われている太鼓踊や盆踊りなども念仏踊の影響を受けています。尚、近世の初めに¹出雲大社の巫女と伝えられる阿国が、この頃、民衆の間に行き渡っていた念仏踊に歌を交えて踊ったのが歌舞伎の創始となったのはよく知られています。

3 廃絶した六齋念仏

京都には多くの六齋の伝承があり、第二次世界大戦後まで行われていたものも少なくありません。（抜粋）

◆田中六齋念仏

京都左京区元田中に六齋念仏講があり、念仏六齋と芸能六齋を合わせ持っていました。

戦後までそれぞれは伝承されていましたが、いつしか廃れ、知る人もいなくなりました。楽器類は、各戸から集めて干菜寺（光勝寺）に寄進され保存されています。

田中地域は、干菜寺と昔から強いつながりを保ち、知恩院で修せられた「法然上人²大遠忌」に参仕されていました。現在、干菜寺での六齋踊り奉納が実現し、小山郷六齋として「田中村六齋」の看板が掲げられています。

◆桂六齋

京都西京区桂に行われていた六齋は、桂地藏前六齋と言われ、芸物を特色としたことで知られていました。比較的最近まで行われ、伝承者もおられるかと思いますが、消息が聞かれなくなっています。

◆下津林六齋

京都市西京区下津林に伝わる六齋で、下津林の氏神五社神社の八朔祭（8月31日）に行われていました。19の曲目があり、「発願」で始まり、この順に各曲を演じ、最後に「願以此徳」で終わるしきたりでした。

この他、京都西南郊には、牛ヶ瀬六齋、川島六齋、中川原六齋、石島六齋、新田六齋、大藪六齋、土川六齋が知られ、牛ヶ瀬には、虎が太い一本の竹を昇降する「竹に虎」といった変わった曲もあったといひます。獅子の曲芸が変じたものと考えられています。それぞれ特色ある六齋であったけれどもすべて廃絶することになりました。

4 六齋日と念仏

六齋念仏の『六齋』が仏教でいうところの六齋日であることは知られています。月のうち（8・14・15・23・29・30）の六日間は、悪鬼が出て来て人命を奪う不吉な日とされ、この日は謹んで仏縁を頼み、鬼神を回向して悪行から遠ざける日とされていました。

念仏がこの六齋日と結びついたのはいつ頃のことであるかは不明ですが、六齋日の意味からして、その結びつきは当然です。問題はこの六齋日の信仰をいつ頃広めたのかです。

持齋日である六齋日と念仏が結びついた『六齋念仏』という名称の文献的初見は、³五来重博士によれば、奈良県宇智郡阪合部村（現五条市）待乳峠の西福寺板碑群の中にある板碑に「六齋念仏供養延徳二年九月十五日」とあります。

現在、六齋念仏は、高野山を中心とする和歌山県にその古い姿が残されており、待乳峠もその勢力下にあったというから、延徳2年（1490年）の板碑があっても不思議ではありません。六齋念仏の伝播と高野山の念仏聖の関係が伺えて興味深くなります。

高野山近辺の六齋念仏もそうですが、六齋念仏の風習は主に庶民の間に広まったといえます。しかも農村部においてその分布は濃厚で、宗派性の強い村落寺院を中心とせず、一地带あげての講など他、任意の集団を構成しての行事であることが特色があります。

この特色はとりもなおさず六齋念仏の伝播の時間及び方法の手掛りとされています。

5 干菜寺と念仏六齋念仏

京都の六齋は、干菜寺系（念仏六齋）と空也堂系（芸能六齋）に分類されます。

京都市左京区田中の光福寺（俗称干菜寺）に宝暦五年（1755年）に整備された浄土常修六齋念仏興起をはじめとする文書によれば、光福寺は、文永2年（1265年）に六齋念仏をはじめ、生和2年（1313年）に常行六齋念仏の勅諭が下されています。

五来重博士も指摘されるように、このあたりまでは伝説として、永正年間（1504～1521年）に後柏原天皇より、六齋念仏総本寺の勅号をまわったという記事では、一部史実の反映とみることも出来そうです。永正といえば、待乳山の板碑に遅れること21年程で、事実上六齋念仏が京都近郊に広く伝承され、その宗教的支柱ともいべき総括寺院の必要にせまられ、その結果その役割を荷う寺院がこの頃に生まれています。

光福寺の寺伝によれば、本寺はもと乙訓郡安養谷にあり、浄土宗西山派祖証空也上人三代の法孫道空を中興とし、天文年間（1532～1555年）同寺の給往職信光によって、同じく安養谷に齋教院が開創され、天正10年（1582年）になって、京都丹波の宗心により、現在地に移され、丹波宇津の武蔵寺を合併し、齋教院武蔵寺と号したといえます。

6 空也堂と芸能六齋

鉦や太鼓を用いた念仏を中心とする六齋念仏に芸能的諸要素が入りはじめたのは、江戸時代中期の18世紀後半と言われています。

以前の念仏六齋は、以後もなくなったのではなく、盆や焼香の折の旦那まわりの本来の表看板として連綿と継承されており、現在、なお各講中は発願念仏、焼香太鼓などの名で演じられています。

空也堂が受け継いだ焼香念仏の中心的役割を果たした上鳥羽六齋では、活動が現在も存在し、芸能六齋に走らなかったこともあって、

その古い姿を最もよく残している念仏六齋といえます。

念仏の曲に節白舞・飛観音・焼香太鼓などがあり、高野山を中心とした地帯の六齋念仏とも共通性を持っており、干菜寺系の念仏六齋が中心でした。

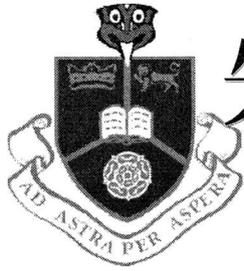
芸能六齋については、近世後期の流行芸能を何でも貧欲に取り入れたということが言えます。もちろん本芸としての六齋念仏があるので、吸収の仕方には一定のルールがあり、現在伝承された曲から、その方法を分類することが出来ます。



焼香太鼓（念仏）／吉祥院六齋保存会

ごらいしげる 【五来重】

1908年（明治41年）3月7日－1993年（平成5年）12月11日。日本を代表する民俗学者の一人。茨城県久慈郡久慈町（現、日立市）に生まれる。水戸高等学校文科甲類を経て、1932年（昭和7年）、東京帝国大学文学部印度哲学科を卒業。一旦、高野山大学助手に就任するも史学を学ぶため京都帝国大学に再入学、1939年（昭和14年）、同大学文学部史学科国史学専攻を卒業した。以後、京都師範学校教諭、高野山大学助教授、同教授を経て、1955年（昭和30年）、大谷大学文学部教授に就任。同大学を拠点として広く仏教民俗学を講じた。1962年（昭和37年）には、大谷大学に学位論文「日本仏教民俗学論攷」を提出し、文学博士の学位を取得している。



先人の誇りと文化を守る

誇り高き ニュージーランド先住民マオリ文化に学ぶ

NZ Rotorua Boys' High School

NZの先住民のマオリ文化に強い関心を持ったのは、息子が4年間、NZ（ロトルア・ボーイズ・ハイ・スクール）にラグビー留学（2001 - 2005）したことが切っ掛けです。その関係で多くのマオリの友人と出会い、マオリ文化に興味を持つようになりました。

留学先のロトルア地区は、マオリ文化の歴史が色濃く残り、マオリ族であるテ・アラワ族が多く暮らし、伝統的なものから、現代的なものまで豊かなマオリ文化に触れることができました。

マオリ文化を継承している多くの村を訪ね、先祖崇拝を持つ彼らの死生観にも大いに影響を受けました。

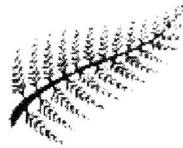


NZ Rotorua Boys' High School

NZは別名アオテオラといい、マオリ語で「白い雲がたなびく国」といわれています。マオリ族は、ポリネシア系の民族で10世紀頃にNZに漂着したと伝わります。

身体が大きく、勇敢かつ好戦的で部族同士で争うなど、古代の日本のような国家が形成されていました。

19世紀半ばにイギリスから開拓者として1万人以上の労働者をNZに送り込みますが、マオリ族間で土地問



NEW ZEALAND

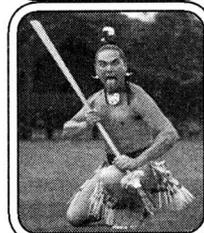
題や人種差別問題等の争いが絶えず、20世紀までマオリ族の抵抗運動が続いていました。この間、1907年にNZはイギリス（大英帝国）の自治領で、1947年に独立国となり、イギリスから入植者が増え始め、NZがイギリス文化の趣を深めていきます。

マオリの人口は全盛期の40%、40万人弱まで減少し、社会的にもイギリス社会と一線を画されました。

オーストラリアの先住民アボリジニやネイティブ・アメリカンなどと同様に、マイノリティの悲哀を余儀なくされました。

NZ北島に位置するロトルア地区は、マオリダンスのテーマにもなっており、マオリ族首長の娘ヒネモアが、恋人トゥタネカイに会うために、湖の中央にあるモコイア島まで泳いで渡ったという伝説のあるロトルア湖を中心とした美しい街です。

マオリ族がマオリ伝統文化を守り、また20mの高さの間欠泉を噴き上げる大地熱地帯があるフェカレワレワは、マオリ族の生活の場であり、観光収入源になっています。



ヒネモアが恋人に会うため泳いだとされるロトルア湖。奥に見えるのがモコイア島



刺青・お歯黒等日本と共通文化

マオリ族は、タヒチ島周辺を父祖とするポリネシア系の民族でハワイキ（マオリ語で故郷）からカヌーで渡って来たという伝説があり、ハワイ等原住民もマオリ族になります。

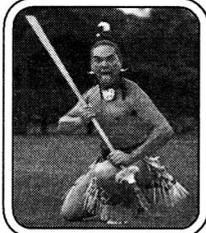
ポリネシアンは、数千キロをカヌーで移動し、古代の木造住居や刺青、お歯黒などの習慣は、日本との共通性もあり、日本人にマオリ族の血が流れている可能性もあるといわれています。マオリ族は、観光収入などで生計を立て、苦難の中で民族の維持をしていますが、世界的に絶滅の危機にある少数民族の現実問題を象徴しています。

先祖崇拜、自然信仰の宗教を持つマオリ族は、その死生観についても私たち日本人に通じるところがあります。

日本



日本の伝統芸能「歌舞伎」



NEW ZEALAND



NZの先住民マオリ族

NZは大陸から離れており、独自の生態系が発達して害獣がないために、鳥の楽園と言われ、二足歩行の大型鳥類モアやエミュー等、ダチョウの一種が多く住み、マオリ族は、それらを狩りし、湖畔や浜で漁り、森で採集して生活をしていました。

15世紀、ヨーロッパの大航海時代に欧米人がこの島を知り、オランダ人が先ず南東に入植しています。

※オランダ・ゼーランド（海の国の意）州名は、ニュージーランドの命名の由来になっている。

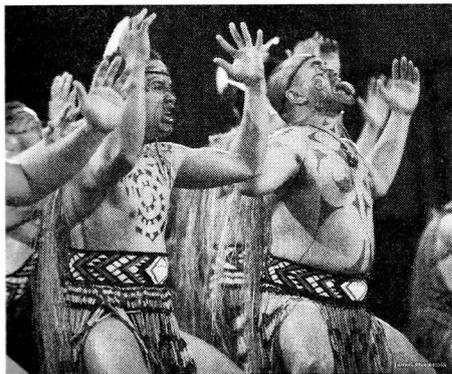
続いて、イギリスがこの島を狙いにきます。当時、マオリ族の文化水準は、ほぼ石器時代に当たり、普通なら侵略されても当然でしたが、マオリ族は、戦闘心に長けており、各部族が対イギリス戦を開始し、果敢に抵抗しました。マオリ族は、戦いで死ぬことは「先祖の名誉に列する誇り」という死生観があるため、石棒や斧を振りかざし、半裸で走り回り、肉弾戦に持ち込み、体を張った戦法を行うなど、最強を誇りました。

イギリス軍に対し、各部族がこれに応戦して泥沼化していきました。

誇り高きNZ先住民 マオリ文化の伝承

孤島であるNZは、本格的に軍隊を送れず、兵力が増強できなかったことでマオリ族に幸います。

ついにイギリスの女王とマオリ部族の国家長が、共同で国を治めるといふ条約を結びます。いわゆる※ワイタンギ条約が締結され、イギリスはマオリと妥協します。マオリ族は、石器時代の武器で近代イギリス軍の侵略を辛くも食い止め誇り高き民族の面目を見事に見せつけました。



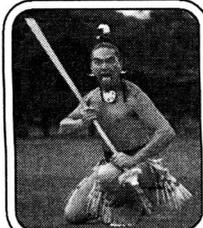
マオリ文化の伝統を守る

しかし、マオリ族が法律を持っていないという概念をたてにし、この条約を振りかざし、マオリ族の土地を奪いました。また、各地でマオリ族を惨殺、侵略し、土地を奪っていきます。部族が乱立し、統一政権を持っていなかったために、これらに体系的、あるいは連合して対処できず、資本経済が入ってくると、その甘い魅力に負け、白人に迎合するマオリ人も激増していきました。

こうしてマオリ文化は廃れ、言葉も失われかけ、誇りも失います。

近代に入るとイギリス系の移民と、益々、教育や生活水準の格差が生まれ、スラム化していきました。

白人との結婚が進み、純粋なマオリ人は次々と減少し、さらにキリス

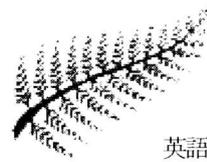


ト教が布教され、マオリの先祖崇拝、自然信仰は荒廃し、巧みに教会を利用した思想改造が進められました。

加えて、マオリ族は文字を持っていなかったために、歴史を書き残すことができず、口頭のみで伝えられてきた民族の歴史は、あっさりとい失われはじめました。しかし、近代マオリの人々は、再び自らの文化を省みて、誇りとし保存しようという運動を起こします。

マオリタンギ（マオリとしてマオリらしく生きること）と呼ばれた運動でマオリの村では、英語以外にも学童にマオリ語を教え、またマオリ学専門の大学も設立され、何よりマオリ文化、文物の再検査、採集、保存活動が各地で盛んになりました。

マオリ人の首相も誕生し、マオリに対して不利な法律も改正され、また大学就学率も増加し、マオリの人たちも高学歴化しています。また、公用語も英語とマオリ語の二語となりました。



銀のシダ木
英語: Silver Fern Tree
マオリ語: Ponga、
学名: Cyathea dealbata

※ワイタンギ条約 (Treaty of Waitangi)

多くのヨーロッパ人が、金、オットセイの毛皮、そして土地を求めてNZにやって来た。やがて土地の所有権をめぐる白人とマオリの衝突が深刻化し、1840年2月6日、イギリス女王代理の総督とマオリの指導者46人との間でワイタンギ条約が締結された。これ以降ニュージーランドは事実上イギリスの植民地となる。しかし、この条約には不平等な点があり、その後も多くの争いや訴訟が起こっている。

その一方で、現在でもこの条約がマオリ人の人権を保護する根拠となっている。

マオリ文化と戦いの誇り

オールブラックスに生きる

New Zealand
MAORI

息子とマオリ部落を訊ねたとき、案内していただいた元NZラグビー地区代表のご老人が本場のハカを見せてくれたり、ハカの意味を教えてくださいました。日本人のことを第二次世界大戦で白人と戦った国として、ある意味、勇敢な国と称してくれました。ご老人は、「マオリの生活は、白人系NZ人に比べて裕福とはいいがたい。就労意欲も田舎では白人に劣り、マオリの人たちの生活は、まだまだ改善がある点もある」と話されたのが印象に残っています。

マオリ文化と戦いの誇りは、NZラグビーユニオンナショナルチーム（愛称：オールブラックス）に受け継がれています。

過去、何人ものマオリ系の選手がキャプテンを勤め、ジョナ・ロムーやタナ・ウマガなど、マオリ人の素晴らしい選手も数多く出ています。オールブラックスの試合前には「カマテ、カマテ…」という掛け声の踊りは「ハカ」と呼ばれ、マオリ族の戦前に「死地に赴く覚悟と生の未練を捨てる意識高揚のための戦いの踊り」が行われます。

伝承されるオールブラックスのハカ・カマテは、1820年頃、ソーティ・トア部族のテ・ラウパラハ族長が踊ったもので、テ・ラウパラハは敵に追われて、地下の食料庫に逃げ込み隠れ、這い出してみると目の前に人がいて、殺されると観念したが、幸運なことにテ・ラウパラハと親しい部族の長であったため救出されました。その喜びと感謝の気持ちを込めて踊ったものがハカ・カマテでした。

1905年のイギリス遠征の際にオールブラックスが戦いの踊りの要素を取り入れたものを初めて踊り、それ以後、オールブラックスに受け継がれることとなりました。現在、試合前にハカを舞う意味は、オールブラックスは、この対戦を喜んで受け入れ、対戦を望んでくれたチームに対し敬意を表する意が込められており、マオリの文化と戦いの誇りがカハに生きています。



試合前に行うハカ（オールブラックス）

a ka mate, ka mate
ka ora, ka ora
ka mate, ka mate
ka ora, ka ora
tenei te tangata puhuruhuru
nana i tiki mai whakawhiti te ra
a hupane
a kaupane
a hupane, kaupane
whiti te ra
hi!

私は死ぬ！ 私は死ぬ！

私は生きる！ 私は生きる！

（以上を2回繰り返し）

見よ、この勇気ある者を

ここにいる毛深い男が再び太陽を輝かせる！

一步はしごを上へ！ さらに一步上へ！

一步はしごを上へ！ そして最後の一步！

そして外へ一步！

太陽の光の中へ！